

関係各位

大阪府環境農林水産部農政室長

病虫害発生予察情報について (予報第3号(7月))

標記について、次のとおり発表します。

なお、当室では、「病虫害発生予察情報」を主に農業指導者向け、別途発出する「病虫害発生・防除情報メールサービス」を主に農業者向けとして発信しております。

病虫害発生予察情報については、当該月に発生が懸念される病虫害のうち、巡回調査等に基づき発生量の多少を予報できる病虫害について主に記載しています。

《特に発生に注意》

【バラ科果樹】 **クビアカツヤカミキリ**

【なす】 **うどんこ病**

【ねぎ】 **ネギアザミウマ(えそ条斑病)**

【さつまいも(かんしょ)】 **サツマイモ基腐病**

【野菜類・花き類】 **ハスモンヨトウ、オオタバコガ、アブラムシ類、コナジラミ類**

《7月の予報概要》

A 水稲

品目	程度				
	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
水稲			いもち病		
			縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)		
		斑点米カメムシ類			

※発生に注意:ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)

B 果樹類

品目	程度				
	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
ぶどう			べと病		
			褐斑病		
			晩腐病		
			黒とう病		
			チャノキイロアザミウマ		
もも			せん孔細菌病		
			シンクイムシ類		
バラ科果樹	発生に注意: クビアカツヤカミキリ				
みかん			黒点病		
			ミカンハダニ		
			ミカンサビダニ		

いちじく			アザミウマ類	
果樹類全般		果樹カメムシ類		

C 野菜類

品目	程度				
	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
なす			すすかび病		
			灰色かび病		
				うどんこ病	
			アザミウマ類		
ねぎ	発生に注意:さび病、ネギハモグリバエ、 <u>ネギアザミウマ(えそ条斑病)</u>				
きつまいも (かんしょ)	発生に注意: <u>サツマイモ基腐病</u>				

※ねぎは令和5年6月より巡回調査を開始したため、平年値がありません。

D 花き

品目	程度				
	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
きく			黒斑病・褐斑病		
			アザミウマ類		

E 野菜類・花き類

品目	程度				
	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
野菜類・花き類			シロイチモジヨトウ		
				ハスモンヨトウ	
			コナガ		
				オオタバコガ	
				アブラムシ類	
				コナジラミ類	

《(参考)7月の気象予報》 (大阪管区气象台6月22日(木)発表)

気温	低い(10%)	平年並(30%)	高い(60%)
降水量	少ない(30%)	平年並(30%)	多い(40%)
日照時間	少ない(40%)	平年並(30%)	多い(30%)

A 水稻

病害虫名	発生量	予報の根拠・注意すべき事項
いもち病	並	[予報の根拠] ・6月の巡回調査では、発生は見られなかった(平年並)。 ・7月の降水量は多いと予想されている。
		[注意すべき事項] ・田植後の余り苗を水田に放置しない。 ・雑草を除去し、通風を良好にする。 ・窒素肥料の過用を避ける。
縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	並	[予報の根拠] ・6月の巡回調査では、発生は見られなかった(平年並)。 ・昨年度の巡回調査では、発生は平年並であった。
		[注意すべき事項] ・ヒメトビウンカによって媒介されるウイルス病であるため、ヒメトビウンカの防除薬剤を施用する。 ・雑草を除去し、通風を良好にする。 ・窒素肥料の過用を避ける。
斑点米カメムシ類	やや少ない ～並	[予報の根拠] ・6月の予察灯による誘殺調査では平年よりやや少なかった。 ・7月の気温は高いと予報されている。
		[注意すべき事項] ・近年、本府ではアカスジカスミカメ、イネホソミドリカスミカメ(別名アカヒゲホソミドリカスミカメ)、ホソハリカメムシなどの発生が多い。 ・イネが出穂すると畦畔や周辺のイネ科雑草から水田に飛来してくるので、出穂10日前までに水田周辺の畦畔や休耕田の除草を実施する。
ジャンボタニシ (スクミリンゴガイ)	発生に注意	[注意すべき事項] ・水深4cm以下の浅水管理を行う。 ・桃色の卵塊は水中へ掻き落とし、成貝は拾い取り、処分する。 ・田植直後から約20日後までの食害による被害が大きい。

B 果樹類

1 ぶどう

病害虫名	発生量	予報の根拠・注意すべき事項
べと病	並	[予報の根拠] ・6月の巡回調査では、発生は見られなかった(平年並)。 ・植物防疫協力員等から、一部地域で平年より多く発生しているとの報告があった。 ・7月の気温は高い・降水量は多いと予想されている。
		[注意すべき事項] ・発生を認めたら、被害葉を速やかに取り除くとともに、初期防除を徹底する。

褐斑病	並～ <u>やや多い</u>	[予報の根拠] ・6月の巡回調査では、発生は平年並であった。 ・7月の降水量は多いと予想されている。
		[注意すべき事項] ・枯枝や落葉、被害葉は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
晩腐病	並	[予報の根拠] ・6月の巡回調査では、発生は見られなかった(平年並)。 ・7月の降水量は多いと予想されている。
		[注意すべき事項] ・被害果房は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。 ・施設内への雨滴の侵入を防ぐ。
黒とう病	並	[予報の根拠] ・6月の巡回調査では、発生は見られなかった(平年並)。 ・7月の降水量は多いと予想されている。
		[注意すべき事項] ・伝染源となる発病枝を除去し、適切に処分する。 ・同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
チャノキイロアザ ミウマ	並～ <u>やや多い</u>	[予報の根拠] ・6月の巡回調査では、発生は見られなかった(平年並)。 ・6月の黄色粘着トラップ調査における誘殺虫数は平年よりやや多かった。 ・7月の気温は高いと予想されている。
		[注意すべき事項] ・同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

2 もも

病害虫名	発生量	予報の根拠・注意すべき事項
せん孔細菌病	並	[予報の根拠] ・6月の巡回調査では、発生は平年より少なかった。 ・7月の降水量は多いと予想されている。
		[注意すべき事項] ・伝染源となる発病葉・枝・果実は除去し、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。 ・薬剤防除は多発してからでは効果が劣るため、早めの予防散布を心がける。降雨前が効果的。 ・降雨前に袋かけを行い、雨滴による感染を防止する。 ・風当たりの強い園地では、防風ネット等を設置する。
シンクイムシ類	並	[予報の根拠] ・6月の巡回調査では、発生は平年よりやや多かった。 ・フェロモントラップ調査における誘殺虫数は平年より少なかった。 ・7月の気温は高いと予想されている。
		[注意すべき事項] ・ももの果実に食入するシンクイムシ類は、ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ、モモノゴマダラノメイガがある。 ・被害果実や被害枝は除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

3 バラ科果樹

病害虫名	発生量	予報の根拠・注意すべき事項
クビアカツヤカミ キリ	発生に注意	<p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼虫は樹体内を食害し、4月～10月頃にフラス(幼虫の糞・木くず・樹脂の混合物で中華麺～うどん状に固まる)を排出する。 ・6～8月に成虫が羽化する。 ・フラスの発生を見逃さないようにほ場をよく見回る。 ・フラスが見られたら、千枚通しや針金等でフラスをかき出してから薬剤を注入する。 ・発生地域では、成虫発生時期(6月～8月)に、成虫対象の登録農薬を散布する。

4 みかん

病害虫名	発生量	予報の根拠・注意すべき事項
黒点病	並	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月の巡回調査では、発生は見られなかった(平年並)。 ・7月の降水量は多いと予想されている。
		<p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝染源となる枯枝は除去し、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
ミカンハダニ	並～ <u>やや多い</u>	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月の巡回調査では、発生は平年並であった。 ・7月の気温は高いと予想されている。
		<p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
ミカンサビダニ	並	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月の巡回調査では、発生は見られなかった(平年並)。 ・7月の気温は高いと予想されている。
		<p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

5 いちじく

病害虫名	発生量	予報の根拠・注意すべき事項
アザミウマ類	並～ <u>やや多い</u>	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月の青色粘着板による誘殺虫数は昨年より多かった。 ・植物防疫協力員から一部地域で平年より発生が多いとの報告があった。 ・7月の気温は高いと予想されている。
		<p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主にネギアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ハナアザミウマがいちじくを加害する。 ・果実内に侵入し食害する。食害された果実は内部が変色する。 ・ほ場の周囲を 0.8mm 目合いの赤色ネットで覆うとともに、光反射シートをマルチとして設置し、成虫の侵入を抑える。

6 果樹類全般

病害虫名	発生量	予報の根拠・注意すべき事項
果樹カメムシ類	やや少ない ～並	[予報の根拠] ・6月のフェロモントラップ調査における誘殺虫数は平年より少なかった。 ・6月の巡回調査では、発生は見られなかった(平年並)。 ・7月の気温は高いと予想されている。
		[注意すべき事項] ・園地により飛来量は大きく異なる可能性があるため、園内を見回り発生及び被害状況を確認する。発生が見られる場合は速やかに薬剤防除を実施する。

C 野菜類

1 なす

病害虫名	発生量	予報の根拠・防除上注意すべき事項
すすかび病	並	[予報の根拠] ・6月の巡回調査では、発生は平年より少なかった。 ・7月の気温は高い・降水量は多いと予想されている。 [注意すべき事項] ・高温多湿になる施設栽培で発生が多いため、適度に換気を行い、湿度を下げる。 ・同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。QoI 剤(アミスター、ストロビー、シグナムなど)、SDHI 剤(アフエット、カンタス、シグナムなど)等は、薬剤耐性菌を生じやすいので、1作1回程度の使用にとどめる。
灰色かび病	並～ <u>やや多い</u>	[予報の根拠] ・6月の巡回調査では、発生は平年並であった。 ・7月の気温は高い・降水量は多いと予想されている。 [注意すべき事項] ・咲き終わった花卉や幼果に感染しやすい。 ・20℃程度の多湿な環境条件や過繁茂で発生が多くなる。 ・同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。QoI 剤(シグナムなど)、SDHI 剤(アフエット、カンタス、シグナムなど)等は、薬剤耐性菌を生じやすいので、1作1回程度の使用にとどめる。
うどんこ病	<u>やや多い</u>	[予報の根拠] ・6月の巡回調査では、発生は平年よりやや多かった。 ・7月の降水量は多い・日照時間は少ないと予想されている。

うどんこ病	<u>やや多い</u>	<p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・窒素過多で気温が 25～28℃、湿度が 50～80% で日照不足が続くと発生する。 ・同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。QoI 剤（アミスター、ストロビー、シグナムなど）、SDHI 剤（アフエット、シグナムなど）等は、薬剤耐性菌を生じやすいので、1作1回程度の使用にとどめる。
アザミウマ類	並～ <u>やや多い</u>	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月の巡回調査では、発生は平年並であった。 ・植物防疫協力員から一部地域で平年より発生が多いとの報告があった。 ・7月の気温は高いと予想されている。 <p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感受性が低下している薬剤が多く、発生が増えると防除が困難なため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 ・葉の被害に注意し、少発生時の防除を徹底する。 ・施設栽培では、開口部に 0.8mm 目合いの赤色ネットを張り、成虫の侵入を防止する。 ・露地栽培では、天敵昆虫の温存を図るため、ソルゴー囲い込み栽培などを行う。

2 ねぎ ※ねぎは令和5年6月より巡回調査を開始したため、平年値がありません。

病害虫名	発生量	予報の根拠・防除上注意すべき事項
さび病	発生に注意	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月の巡回調査では被害株率が約 26% であった。 ・7月の降水量は多いと予想されている。 <p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・春期と秋期の2回、気温が22℃前後で雨が多い時に発生しやすい。 ・菌は被害植物上で越冬するため、被害葉や残さはほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
ネギハモグリバエ	発生に注意	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月の巡回調査では被害株率が約 2% であった。 ・7月の気温は高い・降水量は多いと予想されている。 <p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近年、従来の系統とは食害方法が異なる新系統の発生が確認されている。一葉に複数頭の幼虫が内部に潜り込んで集中的に葉肉を食害し、葉が白化したようになる。 ・発生を認めたら、系統にかかわらず、「ハモグリバエ類」「ネギハモグリバエ」に適用のある薬剤を散布し、発生初期の防除を徹底する。
ネギアザミウマ (えそ条斑病)	発生に注意	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月の巡回調査ではネギアザミウマの寄生株率が約3%であり、えそ条斑病の被害株率が約15%であった。 ・7月の気温は高い・降水量は多いと予想されている。

ネギアザミウマ (えそ条斑病)	発生に注意	<p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ネギアザミウマは、高温で少雨の時に多発しやすい。 ・薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 ・えそ条斑病の病原ウイルスであるアイリスイエロースポットウイルス(IYSV)を媒介する。 ・えそ条斑病はねぎ、たまねぎ、にら等のユリ科野菜や、トルコギキョウ、アルストロメリア等の花き類で被害が大きい。
--------------------	-------	--

3 きつまいも(かんしょ)

病害虫名	発生量	予報の根拠・防除上注意すべき事項
サツマイモ基腐病	発生に注意	<p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・消毒済みの苗を購入する、もしくは登録のある農薬で消毒後に植え付ける。 ・水はけのよい畑を選ぶ、畑の排水を確保するなどして、畑に水がたまらないようにする。 ・早期発見に努める。発生株は見つけ次第抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分し、その後薬剤散布する。

D 花き(きく)

病害虫名	発生量	予報の根拠・防除上注意すべき事項
黒斑病・ 褐斑病	並	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月の巡回調査では、発生は平年より少なかった。 ・7月の降水量は多いと予想されている。 <p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・降雨の多い場合に発生が多いので、発生前から薬剤の予防散布を行う。 ・被害葉は早めに取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。 ・QoI剤は、薬剤耐性菌を生じやすいので、1作1回程度の使用にとどめる。
アザミウマ類	並～ <u>やや多い</u>	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月の巡回調査では、発生は平年並であった。 ・7月の気温は高い・降水量は多いと予想されている。 <p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・品種により被害の現れ方に差がある。 ・施設栽培では、開口部を 0.8mm 目合いの赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。 ・ほ場内部、周辺の除草に努める。ビニールなどのマルチングにより、土中で蛹化するのを防ぐ。 ・きくの残さは放置せず、ほ場外に持ち出し処分する。 ・感受性が低下している薬剤が多く、発生が増えると防除が困難であるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 ・葉の被害に注意し、少発生時の防除を徹底する。

E 野菜類・花き類

病害虫名	発生量	予報の根拠・防除上注意すべき事項
シロイチモジヨトウ	並～ <u>やや多い</u>	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月のフェロモントラップ調査における誘殺虫数は平年並であった。 ・6月の巡回調査では、発生は平年並であった。 ・7月の気温は高いと予想されている。 <p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発生初期(若齢幼虫期)に防除を徹底する。卵塊や集団でいる幼虫の除去に努める。 ・同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。特にジアミド系薬剤の連用を避ける。
ハスモンヨトウ	<u>やや多い</u>	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月のフェロモントラップ調査における誘殺虫数は複数の地点で平年より多かった。 ・6月の巡回調査では、発生は平年よりやや多かった。 ・7月の気温は高いと予想されている。 <p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発生初期(若齢幼虫期)に防除を徹底する。卵塊や集団でいる幼虫の除去に努める。 ・同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
コナガ	並	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月のフェロモントラップ調査における誘殺虫数は平年よりやや少なかった。 ・7月の気温は高いと予想されている。 <p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発生初期に防除を行う。 ・同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。特にジアミド系薬剤の連用は避ける。
オオタバコガ	<u>やや多い</u>	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月のフェロモントラップ調査における誘殺虫数は複数の地点で平年より多かった。 ・6月のなす(露地栽培)での巡回調査では、幼虫の発生は平年より少なかったが、卵は確認された。 ・7月の気温は高いと予想されている。 <p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼虫の捕殺は、被害軽減効果大きい。 ・摘除した茎葉や果実にも、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場から持ち出し処分する。
アブラムシ類	<u>やや多い</u>	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月の巡回調査では、一部で発生が平年より多かった。 ・6月の黄色水盤調査における発生が平年よりやや多かった。 ・7月の気温は高いと予想されている。

アブラムシ類	<u>やや多い</u>	<p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。 ・薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
コナジラミ類	<u>やや多い</u>	<p>[予報の根拠]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月の巡回調査では、発生は平年より多かった。 ・7月の気温は高いと予想されている。 <p>[注意すべき事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なすやトマト(施設栽培)等で「すす病」を引き起こすほか、トマトではタバココナジラミは吸汁による果実の着色不良や、TYLCV(トマト黄化葉巻ウイルス)を伝搬し、致命的な被害をもたらすこともある。 ・トマト黄化葉巻病の発病株は見つけ次第抜き取り、ほ場外に持ち出し処分する。 ・施設栽培では、開口部に 0.4mm 目合いのネットを張り、成虫の侵入を防止する。 ・ほ場内や周辺部の除草を徹底する。 ・同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

- 大阪府環境農林水産部農政室推進課病虫害防除グループ・ホームページ
<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>
- 病虫害発生情報メールサービス
 申込先 大阪府環境農林水産部農政室推進課病虫害防除グループ・メールサービス担当
 TEL 072-957-0520
<http://www.jppn.ne.jp/osaka/mailservice/mailsservice.html>
- おおさかアグリメール
 申込先 大阪府立環境農林水産総合研究所企画部企画グループおおさかアグリメール受付担当
 TEL 072-979-7070
<https://www.knsk-osaka.jp/nourin/agrimail/>

※情報料無料、受信に要する通信費は自己負担です。